



Title	Memoryscapes and Topographical Imaginations in the Novels of Kazuo Ishiguro
Author(s)	中嶋, 彩佳
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96167
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 (中嶋 彩佳)	
論文題名	Memoryscapes and Topographical Imaginations in the Novels of Kazuo Ishiguro (カズオ・イシグロの小説における記憶風景と地理的想像力)
論文内容の要旨	
本論文の目的は、2017年にノーベル文学賞を受賞した日本生まれのイギリス人作家カズオ・イシグロ(1954-)のこれまでに出版された長編小説八作品のうち、『遠い山なみの光』(1982)、『浮世の画家』(1986)、『日の名残り』(1989)、『わたしたちが孤児だったころ』(2000)、『忘れられた巨人』(2015)の五つの作品について、従来の研究ではほとんど無視されてきた小説の社会的・文化的な背景に新たな光を当てながら、イシグロがこれらの小説の中で、どのように自身を取り巻く現代社会とその様々な社会問題を取り上げ、批判しているかということを明らかにすることである。 この目的を達成するため、本論文の各章では、イシグロの描く記憶と風景との間の重要な関係に焦点を当てながら、歴史的にも地理的にも特定された物語世界を描く小説家の地理的想像力について検証する。本論文で取り上げるイシグロの五つの小説は、歴史的にも地理的にも特定された舞台設定を用いており、その土地の雰囲気やイメージだけでなく、物語の背景となっている第二次世界大戦や日中戦争などの歴史的出来事に関する知識をも読者に想起させる。しかしイシグロは、過去に設定されたこれらの小説舞台について、かつて実際にそうであったと読者が思うようには描いてはいない。歴史的事実に加え、時代設定に矛盾した描写、ステレオタイプや神話的イメージ、映画や小説のジャンルから引き出された非現実的な描写を物語に挿入することによって、イシグロは小説世界の歴史的具體性を希薄にし、その虚構性を強調しているのである。そうすることで、イシグロは、読者がこれらの小説を史実に根差した一種のリアリズム小説であると解釈することを防ぐだけでなく、物語世界と主人公たちの精神世界との象徴的な関係性を前景化しながら、小説が文字通りにも比喩的にも解釈できることを可能にしている。実際、イシグロの小説の多く、特に本論文で取り上げる五つの小説は、作家が属する現代世界やその社会問題に着想を得ており、イシグロは現代的関心事を自身の小説の中で効果的に取り上げるため、世界のどこかでありながら、現実にはどこにもない場所として、つまり、イシグロ自身の、彼の主人公たちの、そして読者の記憶の風景として物語世界を描いていることを明らかにする。 第一章では、イシグロの出生地である日本を舞台にした第一作目の長編『遠い山なみの光』と第二作『浮世の画家』について、これら「日本小説」が執筆・出版された1980年代当時のイギリスの文化的背景、特にイギリス文学における多文化的傾向とマイノリティ作家の小説を歴史的・文化的に「真正」な表現としてみなす新しい批評的傾向に焦点を当てながら再評価する。イシグロが文壇デビューを果たした1980年代は、インド系イギリス人作家のサルマン・ラシュディ(1947-)やスリランカ生まれのカナダ作家マイケル・オンダーチェ(1943-)など、民族的・文化的にマイノリティであるイギリス人作家やコモンウェルス出身の小説家が数多くデビューした時代であった。このようなイギリス文学における「周縁的な」作家の作品の多くは、自伝的であるとみなされ、作者の民族的・文化的ルーツとなっている国や地域を正確に表現していると捉えられてきた。『遠い山なみの光』と『浮世の画家』に関する初期研究の多くも、「日本で生まれたイギリス人」作家であるというイシグロの二重のアイデンティティを強調するとしながらも、特に「日本小説」の「日本らしさ」や「日本性」を強調してきた。従来の研究に対し、本章では、多くの批評家や研究者の期待に反して、イシグロの『遠い山なみの光』と『浮世の画家』は、作家が属する現代社会、つまり、1970年代と1980年代のイギリス社会とその問題——特に、1970年代の第二次フェミニズム運動と1980年代のマーガレット・サッチャー政権下での急速な社会変化——に着想を得ていることを指摘し、これらの「日本小説」を戦前・戦後の日本を舞台とした物語として文字通りに読むだけでなく、イシグロと同時代のイギリス社会とその問題について間接的に検討した物語として比喩的に解釈することをも可能にしている物語技巧を分析する。マイノリティ作家の文学作品を解釈する上で、彼らの民族的・文化的背景を考慮に入れることが重要視されていた1980年代当時において、イシグロの初期作品は、戦後の日本という時代設定とは矛盾する描写や、西洋人が思い描く日本や日本人に対するステレオタイプが物語に組み込まれているという点で、非常に異色であると言える。イシグロは自身の日本の記憶を基盤に、現	

実の日本から奇妙に遊離した小説世界を提示することで、読者がこの「日本小説」を歴史的事実に根差した一種のリアリズム小説であると解釈することを巧妙に防ぎ、一見日本を描いているように見える物語世界と一人称の語り手の精神世界との象徴的な関係を強調しているのである。

第二章の目的は、イシグロの第三作目の長編『日の名残り』について、この小説が執筆・出版された1980年代イギリスの社会的・文化的背景——ヘリテージ産業の興隆、ヘリテージ映画の流行、そして、イギリス社会に蔓延する大英帝国時代に対するノスタルジア——に照らし合わせて再考することである。本作品で描かれる二つの舞台、イギリスの田園風景と壮麗なカントリー・ハウスは、1980年代に人気を博したヘリテージ映画が「典型的にイギリス的」な舞台として好んで用いた舞台設定である。これらの舞台背景に加え、イギリス人執事スティーブンスとその貴族の主人という「典型的にイギリス的」な登場人物と感情の抑制というヘリテージ映画に頻出する主題を描く『日の名残り』という小説は、大英帝国の過去の栄華を郷愁的に描くこの映画ジャンルとイギリス社会に当時蔓延っていたノスタルジックな風潮に対するイシグロの批判的な応答であると解釈することができる。イシグロは信頼できない一人称の語り手であるスティーブンスの限定された視点と曖昧な記憶から物語を提示しながら、階級社会やイギリス貴族とナチス・ドイツとの繋がり、反ユダヤ主義といった帝国時代の負の側面を徐々に明らかにすることによって、ヘリテージ映画で描かれる理想化されたイギリスの過去のイメージを不安定化し、解体していることを明らかにする。

第三章では、イシグロの第五作目となる長編『わたしたちが孤児だったころ』を取り上げる。この小説は、ロンドンの私立探偵として活躍するクリストファー・バンクスを一人称の語り手として用いているのにもかかわらず、彼が描写する物語世界が読者の知る現実世界から奇妙に遊離していることが原因し、多くの批評家や研究者から一貫性がないとして批判されてきた。本章では、この特異な小説世界を、イギリスの伝統的文学、特にヴィクトリア朝の教養小説と19世紀後半から20世紀前半に書かれた探偵小説に対するイシグロの挑戦として読み解く。多くの読者が「起こり得そうもない」と考えた作中の描写は、小説の舞台となっている20世紀前半のロンドンや上海の社会的・文化的規範に基づいたものではなく、教養小説と探偵小説という文学ジャンルの伝統や慣習に基づいているということを明らかにする。両親が失踪し、孤児になったというトラウマ的体験のせいで、主人公バンクスの現実感覚が損なわれているという事実を戯画化するため、イシグロは小説の中盤で、教養小説と探偵小説という二つの文学ジャンルの規範や価値観、さらに、語り手自身の幼少期の幻想に従って物語世界を歪めて描いている。そのため、バンクスが両親の失踪に関する真実を理解した時、彼の語る物語世界は、再び現実的なものへと変わるのである。本章では、『わたしたちが孤児だったころ』において、主人公バンクスが幼少期から抜け出す長い旅を効果的に描くため、イシグロは物語の一部を大英帝国の中心であるロンドンと、イギリスの半植民地的都市であった上海に設定し、帝国の全盛期に書かれた教養小説や探偵小説と国家の植民地政策との結びつきを批判しながら、これらのジャンルの特徴や歴史的・イデオロギー的背景を考察していることを確認する。

第四章では、第七作目となる長編『忘れられた巨人』を取り上げ、この小説におけるイシグロの新たな試みとして、三人称の語り手の使用とアーサー王文学やファンタジー小説から借用した超自然的要素に注目し、これらの物語技法が、国家や共同体の集合的記憶という新たなテーマを効果的に表現するだけでなく、本作を「ダブル・クロス・メタファー(a double-cross metaphor)」として提示するために用いられていることを明らかにする。本章では、集団的忘却を引き起こすための魔法がかけられた雌竜クエリグや伝説的英雄アーサー王の甥であり最後の騎士であるガウェイン卿が登場する幻想的な小説世界を物語る三人称の語り手として、ギリシャ神話に登場するカロンのような不老不死の船頭が用いられていることを指摘し、この語り手が、小説の舞台となっている6世紀のイギリスと、より最近のイギリスとの連続性と差異を強調しながら、死者を含む全世代のイギリス人に向けて物語を語っていることを確認する。このような語り手を用いることで、イシグロは『忘れられた巨人』を「ダブル・クロス・メタファー」として提示し、彼の読者が本作品を文字通りにも比喩的にも解釈することを可能にしている。世界中のイシグロの読者にとって、ブリトン人とサクソン人の民族的・宗教的対立と過去の戦争中に起こった残虐行為に関する記憶の忘却という物語は、フロイト的な「遮蔽記憶」として機能し、彼らが自分の属する国や共同体に存在するはずの抑圧された過去の記憶について間接的に検討すること可能にしている。同時に、イシグロは、イギリスの読者が本作を文字通りに解釈することを望んでいるようである。つまり、超自然的生物や魔法が登場する『忘れられた巨人』という小説は、オルタナティブなイギリスのもう一つの歴史を描いており、現代イギリス社会に暮らすイシグロの読者に、実際のイギリスの歴史——長い歴史の中で、イギリスという国が移民によって何度も作り変えられてきたという事実——を想起させることで、近年の差し迫った問題であるイギリス人と移民との対立について再考するよう促しているのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (中 嶋 彩 佳)	
論文審査担当者	(職) 氏 名
	主 査 大阪大学 教授 山 田 雄 三
	副 査 大阪大学 教授 片 渕 悦 久
	副 査 大阪大学 准教授 森 本 道 孝
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： Memoryscapes and Topographical Imaginations in the Novels of Kazuo Ishiguro

学位申請者 中 嶋 彩 佳

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	山 田 雄 三
副査	大阪大学教授	片 渕 悦 久
副査	大阪大学准教授	森 本 道 孝

【論文内容の要旨】

本論文が記述しているのは、現代英語圏文学を代表する書き手であるカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro: 1954-) の 5 作品をめぐる小説作法の様相である。また、イシグロ自身を取り巻く現代社会とその様々な社会問題を取り上げ、小説作法を通して、重要な批判が試みられていたことが指摘されている。本論文は英語で執筆され、序論、全 4 章からなる本論、結論から構成されている。論文の分量は後注と参考文献リストを含め全体で A4 判 189 ページ、本文の単語数は約 52,000 語である。

本論文で取り上げるイシグロの 5 つの小説は、歴史的にも地理的にも特定された舞台設定を用いており、物語の背景となっている第二次世界大戦や日中戦争などの歴史的出来事に関する知識を読者に想起させる。しかしイシグロは、過去に設定されたこれらの小説舞台について、かつて実際にそうであったと読者が思うようには描いてはいない。歴史的事実と反して、時代設定に矛盾した描写や映画などから引き出された非現実的な描写を物語に挿入することによって、イシグロは小説世界の歴史的具體性を希薄にし、その虚構性を強調しているのである。そうすることで、イシグロは、読者がこれらの小説をリアリズム小説であると解釈することを妨げつつ、物語世界と主人公たちの精神世界との象徴的な関係を比喩的に解釈するよう促している。実際、イシグロは現代史の関心事を小説の中で効果的に取り上げるため、世界のどこかでありながら、現実にはどこにもない場所として、つまり、イシグロ自身の、彼の主人公たちの、そして読者の記憶の風景として物語世界を描いている。本論文はそのことをテキストに即して記述するものである。

第 1 章は日本の戦後を物語の舞台とした小説『遠い山なみの光』と『浮世の画家』を論じるもので、イシグロは自身の日本の記憶を基盤に、現実の日本から奇妙に遊離した小説世界を提示すると指摘される。これらの「日本小説」は戦後の日本のリアリスティックな再現ではなく、イシグロと同時代のサッチャー主義とフェミニズム運動を暗示しており、それを可能とするイシグロの物語技巧を分析している。

イシグロの出世作『日の名残り』を論じる第 2 章では、1980 年代のヘリテージ産業振興や帝国ノスタルジアに照らして、この小説が分析されている。イシグロは信頼できない一人称の語り手に曖昧な語りをさせることで、階級社会や帝国主義の負の側面を明らかにし、理想化された共同体幻想を解体していると説かれる。

第 3 章では『わたしたちが孤児だったころ』を取り上げ、この小説世界を、イギリスの伝統文学である教養小

説と探偵小説に対する作家の挑戦として読み解いている。この小説においてもイシグロは、妄想癖のある語り手を使うことで、帝国のイデオロギーであった「健全なる成長」や「紳士的な解決」に疑問を投げかけていると説かれ、その様相が厚く記述されている。

アーサー王文学を下敷きにしたとされる『忘れられた巨人』を扱った第 4 章で論者は、全知に近い三人称の語り注目する。この小説作法が国家や共同体の集合的記憶をテーマ化しつつも、小説全体が「ダブル・クロス・メタファー(a double-cross metaphor)」となっていると指摘している点で、きわめて独創的である。

論者によると「ダブル・クロス・メタファー」とは、フロイトの「遮蔽記憶」として機能する。読者はアーサー王期の民族闘争に集中しながらも、潜在意識的にはイギリスの共同体が抑圧してきた過去の記憶を呼び起こす。このメタファーを具現化するために、全知に近い三人称の語り死者を含む全世代のイギリス人に向けた語りになっている様相が吟味されている。

以上、本論文が記述しているのは、カズオ・イシグロという現代英語圏文学を代表する書き手が、ローカルな場所を濃密に描くふりをしながら、現代社会を比喩的に描く小説作法である。そうした作法の記述は、サッチャーリズムやナショナリズムとの関連、あるいは精神分析的な解釈と同時になされており、十分な説得力をもつ。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、現代英語圏文学を代表する書き手であるカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro : 1954-) の 5 作品をめぐり小説作法の様相を記述したものである。これまでの研究では看過されてきた、イシグロの同時代的問題意識に着目する本論文が指摘するのは、リアリズム文学と寓意文学という一見、相容れないと思われるジャンルも、語りの技術や小説作法によって同時に提示できるという可能性である。こうした明察は英語圏文学研究の発展に大いに寄与するものである。また、ナショナリズムや民族主義、フェミニズム第二波と、イシグロの小説との歴史的な相互関係も丁寧に分析されており、他分野への波及効果も大いに期待できる。ただし、イシグロの小説全 8 作品のうち、なぜこの 5 作品なのか、その系譜の説明に不十分な点も残る。しかし、この点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。